

日付:2016年3月20日／聖書:ヨハネによる福音書19:16b～30

説教:「十字架の下にある対極の群れ」

ヨハネ福音書では、十字架の下に二つの対照的な人々の群れが描かれている。十字架の番をする兵士たちと十字架のイエスを嘆く女たち。兵士らは十字架上で苦悶するイエスを尻目にはぎ取った衣服を嬉しそうに分け合う。苦しむ者を尻目にくじ引きまでして楽しみながら奪い合っていく。「人権蹂躪」する兵士。もうひとつ、イエスの十字架の下にいる女たち。イエスの母マリア。今、目の前に十字架に苦しむ息子を前にしてどれ程の苦しみ、悲しみ、嘆きの中にあることか。またそのマリアに、イエスに寄り添う女たちがいる。

この二つの対極を見る時、沖縄の置かれた状況もまた映し出されてくるように思う。先週の日曜日に、また一人の女性が米兵に性的暴行を受ける事件が起きた。辺野古キャンプ・シュワブ所属の兵士が那覇市のビジネスホテルに宿泊し、観光客の女性を襲った。この手の事件は、沖縄に米軍基地がある限り無くなることはない。今回の事件は、毎日行われている辺野古新基地建設阻止行動をいつも目の当たりにしている兵士が、沖縄の苦しみ、悲しみ、嘆きの叫びを聞いているにもかかわらず、苦しむ者を尻目に、事件を起こして行く。自分の欲のために、一人の女性の人生に傷を負わせていく。沖縄の歴史にまた一つの悲しみを刻んでいく。

十字架の下には対極の二つの群れがある。苦しむ者と共にあろうとする者と苦しむ者を尻目に欲に駆られる者。双方は、絶対に相容れないものようだが、しかし双方は、キリストの十字架の下にある。私たちは、その対極に何を見るものか。少なくともゲート前でゴスペルを歌うことは、苦しむ者と共にありたいと願うことであり、苦しめる者に抗議の声を上げるとのことである。今一度、ゲート前ゴスペルの必要性を思わされる。受難週の折、私たちは問われているのであろう。十字架を仰いでいるか、苦難に向き合っているかと。

事件に遭われた福岡の女性の上に主の癒しと慰めがあるように。彼女の痛みを覚え、本日の説教とさせて頂きたい。(神谷)